

記日の戀の王廢

ニコニコ 第四十四號

廢王の戀の日記

自から寸毫も
偽はる虚無き
廢王の日記は
赤裸々にその
情史を語る

前ポルチガル王マニエル自筆の艶書數通

永代美知代

葡萄牙革命黨の手より露國革命黨の手に渡り
秘密出版計畫中同國官憲の爲めに沒收され
し此の日記は沒收の厄より遁れしその斷片
を讀むだに無限の興味あり

前葡萄牙王マニエルが在位二箇年の間に書き記した日記は、これまで活字に組まれて世界のあらゆる備忘録中、最も興味あるもの、一つであらう。此日記は、マニエル王が千九百十年十月の大革命に際して、リスボンの近くにあるマフ

ラトの宮殿から豪邸した後で発見された。王自身の備忘録は素より、種々の人を取りやりの書信の控に至るまで、盡く完備して居た。これを手に入れた革命家が、全部マニエル王の露國革命黨員へ送附した。露國の革命黨員は、その内容の露骨、反道徳、一として葡萄牙革命の理由を裏書きせぬものない事を喜び、密々印刷に附し、遠からず世界に

發表する準備を急いでゐた。ところが其事露國政府の知る處となり、原稿は沒收され、鉛版は全部破棄された。然るにその原稿の處々のが革命黨員の手に残り、噂々して、最近米國の某新聞で發表される事になつた。

此の斷片的原稿を綜合して見ると

一等古い日附の分は、マニエル王から獨逸産れの家庭教師、ミス、アガス、ボン、スタツドに宛てた手紙である。彼女は十九歳で王位に

登つたマニエルよりは、十の年上である。役目から離れた後も、久しく宮殿に留まつてゐた。王の手紙は斯うである。

『親しい、懐しいアガツチエンよ——余を信ぜよ、余はどんなにかお前を思つてゐるか、何時も云ふ通り、若しお前さへよければ余はお前を妃にしたいと思つてゐる。若しお前さへ眞實であれば、如何なる権力も力も、吾等を裂く事は出来ぬ。妃になる爲めには、暫らく苦しむのもよからうではないか。全く詩的な、ローマンチックな一夜であつたねえ、あのバルコニーから谷間の景色を見下した心持は、汝のMより』

王の母女王アメリヤは、直ぐ二人の仲を感附いた。でこの家庭教師を密かに葡萄牙から獨逸に追ひ返す一方、手厳しくマニエルを叱りつけた。其上國內の宗教家達をして、代るく王を意見させた。そんなこんな効能であらうか、一箇月の後には王はもう家庭教師の事を忘れて、備忘録に別の人の名前を書くやうになつた。

『若しキツデーがあの様子通りに余を思つてゐると云ふ事さへ確められれば、余は忽ちこの全心を彼女に捧げる。不思議と余は臆病だ。尤々臆病なのは自然なの

だ、若し彼女が獨身でさへあれば——ナアニ些少も怖がる事はないのだが、一體結婚した婦人に近よるのは氣のひけるものだ。彼女も同じに感じるに違ひない。けれども余の親友バジクオ(侍従)は云ふ。何時も「代價さへお拂ひになれば、どんな女でも陛下の思召次第です」

キツデーが誰であるかは知るによしもない、他の斷片に照し合して察すれば、どうやらリスボン駐在の海外外交團の、何人かの夫人であるらしい。そして二人の交情は次の書きさしの手紙に依つて、ほゞ察し得られる。

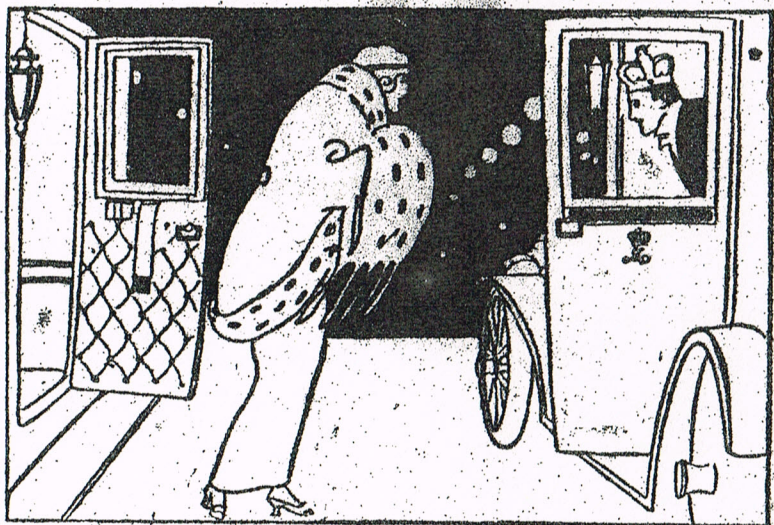
『愛するキツデーよ——今にして思へば余は最初非常に臆病であつた。パタロハからレーリアまでの昨日の遠乗りの樂しかつたこと！而も誰にも見つけられずに済んだのは！たつた一人、余を王だと認めた會堂の老番兵は、スフキンクスと同然、死んでも秘密を饒舌る男ではない。歸りの月のよかつたことと、御身が絶えず物思ひに沈んでゐたことは忘れがたい風情である。此前の日曜に贈つたダイヤモンドの色は大分お氣に入つたらしい。あれは余の祖母の遺物の一つで、クイン、ゲキクトリアが祖母の誕生に贈られたものだ。御身の黒い、夢見るやうな瞳を何日見せて貰へるか、余も次の出會場所を考へて置かう——』

キツデーとどれ程永く關係してゐたかは解らない。ただそれから一週間の後、乃ち千九百八年の八月二十三日には、王は已に他の女の事を書いてゐる。

最後まで王の愛を得しバレンシア

『バレンシアは二王冠に價する、如何なる女もこれ程余の心を握つたものはない。可哀さうに彼女は罪を恐れて、余にキスを拒んだ程敬虔な女である。可憐！彼女は帝王にキスするのを神聖を汚すものと心得てゐる。愛に汚すと云ふ言葉があらうか、眞に愛するものを眞に愛せよ。それでおしまひである。結婚などは第二第三だ』

マニエル王の備忘録で見ると、バレンシアなる女性はそのまでに彼が愛した如何なる女性よりも魅力に富んでゐたらしい。だが此女性が何人なるかは矢



(つ待を身御で中其は余る居てつ待が車動自の二第のれ外町)

張り秘密に閉されてゐる。たゞ彼女の良人が貴族の一人で、當時政府の要職を占めてゐたと云ふ事だけはぼぼ想像せられる。二人の交情は王の時々浮氣を別にして、愈々蒙塵の時迄續いてゐたものらしい。

『バレンシアは愛の結晶である。世界有数の寶石を贈られても、何も貰つても、大した有難くは思はぬらしい。今日も余に「王位を棄て、私と一緒に葡萄牙を出走して下さい。私の愛はあなたが國王であらうと、煉瓦積みであらうと、些少も變りはありません」と云つた。余はまだこんな言葉を他の戀人達から聞いた例がない。全くこれは興味ある問題だ、國王がその位を一人の爲めに犠牲に供するだけの事があらうか、而も余は彼女に一種崇高の精神的戀愛を認める。若し更に強て望まれたならば、余は敢て彼女の爲めに王位を離つてあらう。成程余には野心がある、然し幸福なき名譽が何んであらう、バレンシアは余を善良ならしめ、乃至余を救済するけれども、他の女は誰一人それをなし得ない。とは

云ふものゝ、余は彼女を妻として見る事が出来るであらうか、彼女は餘りに美しく、餘りに感情的である。余は平民共が吾等の關係を精知したとて、何とも感じない。元來女皇なるものは宮殿と同様、王の便宜のために、政府の進む公共的人形に過ぎない。眞に女皇なるものを愛した王は即ち、一人と雖もあるまい。愛は宮邸や議會の決議で、動ずる事は出来ない、勿論帝王は女皇を持たなければならぬ、女皇は又宮殿や公の建築物などのやうに大きくて結露であらねばならぬ。但し愛は不可思議の神祕だ。その深きに從つて益々詩的となる」

又た他の處に斯うも認めてある『余は昨日吾等の隠れ家でバレンシアに出會つた。彼女のキスは他の千百の女のそれに比べて、遙かにス

キートであつた。マフラ宮殿八百八十の部屋々々も我等の隠れ家の、ただ四間の質素で詩的なに比べものにもならない。彼女は如何してあのやうな魔力を持つてゐるのであらうか、廣々とした海に面して、繪のやうな園を下りて行くと、芳烈な空氣が吾等の顔を柔らかに撫でた。波の聲



(姫歌ーピカ)

も風の囁きも、皆な彼女の手の感觸と共に余には大なるハローモントであつた」此處にバレンシアへの手紙の書きさしがある。

『最愛のバレンシア——お互の此上もない密會場所は、幌自動車の中で、これには誰も氣がつくまいと思ふ。今夜の夜會を四五分早く出て、門に待つてゐる婦人用の自動車に乗りたまへ。町に離れに第二の自動車待つてゐる、余はその中で御身を待つ』

母君に對する感情と政治上の知識

マニエルの王位を保護せんが爲めに全力を盡した母皇アメリカに關する記述は此日記の重要部分を占めてゐる。母皇に對しては好い感情を持つてゐたにかゝらず、非常に彼女を怖れる餘り、時には随分思ひ切つて無禮な言葉を書き列ね

である。

『余の母は余を馭者のやうに待遇しようとする。だが余はもう決して母に負ける必要はない。母はデーキセーラー・ド・ノウサ(時の首相にして、皇太后の寵臣たりし人)が余を自分の子供のやうに取り扱ひ、又自由に彼の政策を余に強ひ得るものと考へてゐる。だが如何致しまして阿母様スウサは私の臣です。私は彼の奴隷ではない。此上スウサが大膽な眞似をしようものなら、余には別に取るべき道がある』結婚問題に關しても、母皇に對して満腔の不平を抱いてゐた。



(たれば現で装假じ同と時たれさ殺暗が父)

『國王は何故眞

ない、あてがはれた妻を受けない。母は余から愛情を

實を偽らなければならぬか、彼は法律の上にあり、望んでなされざるはない、彼は絶對の自由意志を有し、戀愛の權利を保有してゐるではないか。余が或る婦人を愛すると云ふ事は、余がその女の良人であると云ふ事を意味する。従つて結婚しなければならぬのなら、余は實際自分の愛する婦人と結婚する然らざれば女皇は公共的人形である。名譽は別つけけれども、情熱はない。現代の結婚制度ほど間違つたものがあらうか、母は余を飾窓の自働人形と同じに心得て、自分の好きに彼方を向かせ、此方を向かせようとする。母は余の爲めに妻を見付けようとしてゐるが、余は決して人工的の結婚はし

奪つて、感情の凍え死をさせようと云ふのだらう。此

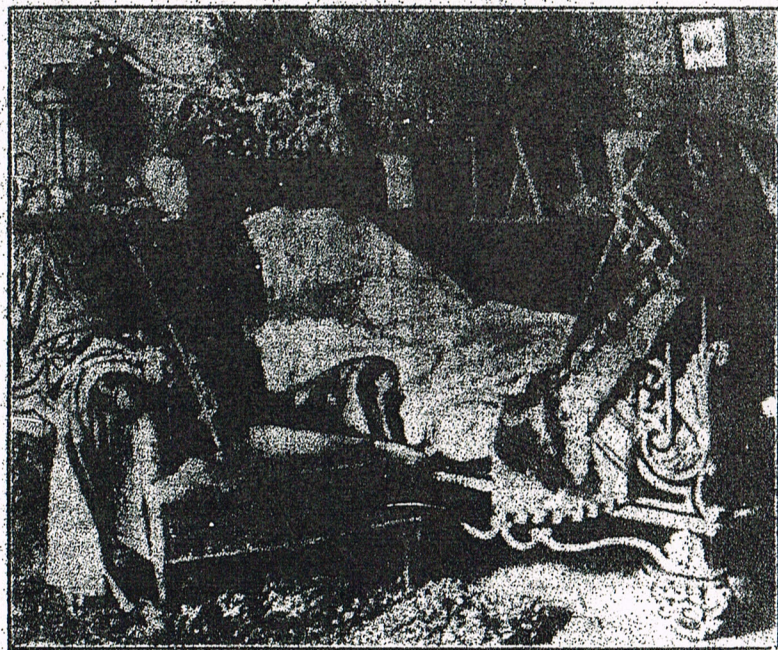
ない。」

政治上の知識も此断片的日記の處々に書き表はされて

居られないのならば、何故彼女を妻に出来ないのか。

千九百十年の夏、マニユエルは巴里に遊んで、故きジョン、ヤコブ、アスタの客となり、多くのアメリカ婦人と交際した。

『アメリカの婦人はその良人なり父親なりが、積み立て得た金を費消する術を心得てゐる。彼女等は著物を著飾つて社交界に出る術を解してゐる美しくはあるが、しかしロマンチックではない。強い性格は持つてゐるが、感情を持つてゐない。好奇的ではあるが、決して情熱を持つてゐ



(室寝の王の裡殿宮るたし寫後分十三塵蒙が王)

あると信じて居る。此葡萄牙に革命騒ぎのあらう筈は

ない。そもくどう云ふ困難のある筈があらう？然るに余の母は何かと云へば革命黨の事を云つて余を脅かす。馬鹿な！葡萄牙は露西亞ではない、英國をのけて世界第一の平國民だ』

竟に宮殿を追はる英皇に對する惡感

有名な歌姫ガビー、デスリーとの關係に就いては、斯う云ふ記述がある。

『ガビーは賢い女だ、王者の注意を惹く術を心得てゐる。余は斯う云ふ賤しい歌姫を助けようとは思はないが、さりとて彼女の願ひを聞き入れない程の無情の王でもな』

そして一箇月の後の日附で

『ガビーは成功した。余はそれを喜ぶ、併し彼女は眞の藝術家としての教育もなく純化もされてない。あゝ云ふ種類の女は永く余をひきつけて置く事は出来ない、余は彼女を一種の友人位に心得てゐるのだが、彼女は

ゐる。

『伯爵はカマコ博士。(革命黨の組織者にして、その領袖たり)カマコ博士の話を大袈裟にするやうに思はれる。人民が何時博士達の無謀に與する事があらう、余の國民は此世界で尤も幸福な國民である、余も亦國民を喜ばす術を知る。況んや余の軍隊は頗る精銳である。昨日も余は此等の題目に就いて、クレーセエロ大佐と談論を交したが、彼も亦革命黨は單に人民をお伽ばなしの國へ連れ込もうとするもので

余が實際自分を愛して居ると思ひ込んでゐるらしい』千九百十年八月十三日、彼はマブラ宮殿の寢室の戸が半夜屢々不思議な、目に見えないものゝ手によつて押し開けられた事を記述し、同じ九月十二日に『恐ろしい！恐ろしい！父が暗殺された時、著て居たのと同じ服装で、窓の處に現はれて「マニユエルよ、お前は自身を惡魔の手に渡したのだ、可哀さうに！」とうめいた。余は殆んど氣絶しようとした。併し再び目を開けた時には、窓の幻は消えて見えなくなつた。かゝ、聖、ペトロ、これは何を語るのであらうか？』それから二日の後

『何となく重苦しい感情が余の胸を壓迫する、何一つ余を楽しましめるものはない。ベナへ出掛けて、パレンシアを訪ねよう、彼女は余の魂を安めるであらう、こんな時に彼女が余の妻であつたならと思ふ。彼女こそ余が他のあらゆる女にも増して未永く愛し得る唯一人である』

葡萄牙の革命はその十月四日マニユエル王がリスボン

